

# 日本人の「あし」の文化的多様性の総合的考察

## 日本人の歩容（1）

栗山緑\*

(e-mail: mkuriyama@hiroshima-u.ac.jp)

---

### 目次

---

1. はじめに
  2. 日本人の歩容形態
    - 2-1. 幕末から明治期
    - 2-2. 現代
    - 2-3. 考察
  3. 結び
- 

## 1. はじめに

人間の「からだ」はみな一様に同じであるが、「からだ」を文化の表象体という観点で見ると、同じ「からだ」でありながら様々な違った様相がみえてくる。

樺山 (2008)は「からだ」は人体としてならば、たいそう貧弱な骨組みのごときもの。しかし、骨組みに歴史・文化という肉付きがほどこされるとき、ほんとうのからだになる」と述べ、「古来の漢字では、からだは‘体’とかかれるが、俗説によれば、骨に歴史・文化の厚みをまとわせて、豊かになったものが、‘からだ’だ。人体の歴史的・文化的の外化が、‘からだ’であるといってよい」と漢字の成立ちを関連付けて説明している<sup>1)</sup>。また、日本人の身体意識を疲労の身体症状から考察した吉竹 (1981)も「肩がこる」とか「腰が痛い」というような表現を英語と比較することにより、ありふれた身体症状の言語表現にさえ、「文化」の違いが反映

---

\* 広島大学大学院

1) 樺山紘一 (2008)『歴史のなかのからだ』、岩波書店、p.8。

されており、「からだそのものが文化である」という感がする」と述べ、「からだ」の部位の認識の違いが言語にあらわれていることから「からだ」の文化を指摘している<sup>2)</sup>。

そこでこのような観点で日本人の「からだ」をみると、女性特有の歩容といわれた「内股歩き」、芸能や武道における「すり足」、茶道や華道に象徴される「正坐」文化など、日本人の「からだ」は「あし」に文化性が色濃く映しだされていることがわかる。

本研究はこのような日本人の「あし」の文化的多様性を追究しているが、本稿において、「あし」の最も基本的動作である「歩く」や「走る」である「歩容」のなかの、「自然歩行」について論考した。

## 2. 日本人の歩容形態

人間の「歩容」形態は、生理学的には無意識に歩いている自由な歩行である「自然歩行」と、競歩や儀式・舞台での歩行や「忍び足」などの意識的に行う歩行である「特殊歩行」に大別される<sup>3)</sup>。

日本人の「自然歩行」の特性について先行研究では、幕末期から明治初期までに来日した外国人の見聞録のなかにある日本人の歩行に関する記述を考察したもの<sup>4)</sup>、現代日本人の歩行形態を生理学的及び社会学的に考察したものがある。そこで、これらの先行研究をもとに、日本人の歩容形態を①幕末から明治期と②現代の二期に分けて考察した。

### 2-1. 幕末から明治期

谷釜(2006)は、幕末期から明治初期までに来日した外国人の見聞録 147 点のなかの 13 点に日本人の歩行に関する記述を確認し考察している。それによると、日本人の「自然歩行」の特徴は①足を引きずること、②小股歩行、③内股歩行、④爪先歩行、⑤前傾姿勢、⑥歩行時の音、が主たるものであった。

まず、「足を引きずる」歩容形態については、日本人男女双方にみられた特徴で、その要因については外国人見聞録のほとんどに記載されていない。しかし、日本の伝統的な履物である下駄や草履はその構造上「後掛け」がないので、歩く度に履物の踵部分が踵から離れ、履物の踵部分が地面を引きずりやすくさせ、足の動き自身も「引きずり足」に導かれ

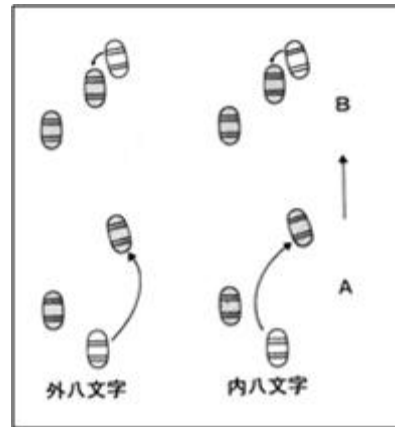
2) 吉竹博(1981)。日本人の身体意識。労働の科学 36 (2)。p.65。

3) 阿久津邦男(1975)『歩行の科学』不味堂新書 15、不味堂、pp.139-142。

4) 谷釜尋徳(2006)。幕末～明治初期における日本人の歩行の特徴について。日本体育大学紀要 36(1)。pp.1-18。

る。矢田部 (2007)が「日本の履物 (草鞋、草履、足半、雪駄、高下駄等)は道具の素材や形が導く歩き方へと身体が自然と導かれていく」と述べているように<sup>5)</sup>、日本人の‘足を引きずる’歩容は、日本の伝統的な履物の着用という外的要因によって形成されたものとみることができるであろう。そして、この特異な歩容形態のなかにも文化が形成されていたことは日本人の歩容における独自性といえる。

それは、「八文字 (はちもんじ)」と呼ばれる江戸期の遊女「花魁 (おいらん)」が花魁道中の際に行なっていた「引きずり足」歩容で、高い塗下駄を素足につっかけ、片手は若い衆の肩に置いて、もう一方の片手は張肘をして目線を中空にすえ、「すり足」でゆっくりと「八」の字の線を描く歩容で、「内八文字」と「外八文字」の二通りがあった<sup>6)</sup> (図1)<sup>7)</sup>。



(図1: 「八文字」の踏み方図)

「内八文字」は京都島原で好まれたもので、歩み出しの際、内股を摺り合せるように踏みだして踵を外へまわし、一端着地した足を半歩引いて正しく正面に向ける。「外八文字」<sup>8)</sup>は江戸吉原で多く行われたもので、

足の踏みだし時に腰を落とししかげんにして股を割って大きく

外へ廻しこむ。この時、股の部分の衣服がはだけて白粉をぬった内股が緋縮緬の二布 (腰巻)を割って見え、大名行列の槍持に似た足運びで勇壮な男歩みでもあった。それは吉原遊女の意地と張りを象徴したもので、「八文字」の踏み方は三年は稽古しなければさまにならなかったという。

次に、「小股歩行」については、着物の着用による影響があげられる。着物は長い丈で体に巻きつけて着用するので、歩幅が制限され短い歩幅 (小股)になってしまう。特に女性の場合は着物の着用方法や着物の生地の違いによって歩幅に違いが生じる<sup>9)</sup>。また、履物の種類によっても歩幅に違いが生じ、男女とも靴を着用している時の歩幅が最も大きく、男性は最短の歩幅であった下駄と約 10cm の差がある<sup>10)</sup>。

「内股歩行」については、女性の場合は特に着物着用時の歩行には裾がはだけることを避けるための「あし」の必然的な動作から導かれる歩容形態といえる。しかし近藤 (1979)は、江戸期以前の絵巻物には‘内股歩き’で描かれている姿はみうけられないこと

5) 矢田部英正 (2007)『美しい日本の身体』、ちくま新書、p.188。

6) 北村一夫(1987)『吉原のホログラフイー：江戸・男と女の風俗』、六興出版、pp.163-167。

7) 北村一夫(1987)、前掲書、p.166。

8) 名妓と呼ばれた「丹前勝山」が創始し、吉原遊女の道中の型となったという。

9) 笹本信子 (1986)。足の着地期・離地期からみた和装時の歩容に関する研究。家政学雑誌 37 (8)。pp.695-704。

10) 阿久津邦男 (1975)、前掲書、pp.62-65。

や、江戸時代になって着物の材料が在来のさりとした麻から、木綿・絹などにかわって着物の裾が足にまつわりつくことが「内股歩き」の要因ではないかと推論し、さらに、かつての日本では「内股歩行」が貞淑温良な婦人の代名詞のようにいわれた時代があったことや、歌舞伎の女形が女らしさを誇張するために「内股歩き」をしたことが、日本人女性にとって「内股歩き」は定番になったに違いないと考察している<sup>11)</sup>。日本人女性の「内股歩行」は、日本の着物という外的要因で形成され、それが女性の典型的な歩容形態となったところが、‘女性らしさ’の象徴とみられるようになったのであろう。

しかし、男性の間にも「内股歩行」の美学が存在していたことが外国人見聞録に記述されている。

① 明治時代に7年間にわたって薩摩の島津家の家庭教師を勤めたイギリス人女性の Howard, Ethel (1865-1931)の記述には、男子も内股歩行を作法としていたことが指摘されている。

At first it was a mystery to me why the children had such terribly turned-in feet. I did not know at the time that it was an old fashioned necessity of the polite world for the feet of a Japanese nobleman to take this position. It tired me more than any other work at the beginning to break the boys of this habit.

(Howard, Ethel. "Japanese Memories.")<sup>12)</sup>

私は最初、子供たちがひどく内股に歩くのが不可解だった。その時は知らなかったのだが、日本の貴族社会での古くさい行儀作法では、内股のほうが行儀よいとされていたのである。最初のうちは、子供たちにこの癖をやめさせようとする努力で、他の仕事よりも何にも増して疲れ果ててしまった。

(ハワード・エセル著、島津久大訳『明治日本見聞録:英国家庭教師婦人の回想』)<sup>13)</sup>

② 幕末に一年間フランス艦隊の一士官として横浜に滞在したデンマーク人青年 Suenso n, Edouard (1842-1921)が、日本人の身なり、髪型や、履物について記述したなかに明記されている。

ところでこの靴(草履)は、軽くて快適なのは確かだが、その形は非実用的で、日本人が

11) 近藤四郎 (1979) 『足の話』、岩波新書、p.99。

12) Howard, Ethel (1918). Japanese Memories. The Chapel River Press. p.12.

13) ハワード・エセル著、島津久大訳 (1992) 『明治日本見聞録:英国家庭教師婦人の回想』、講談社、p.41。

股を広げてよたよた歩くのはそのためである。この独特の歩き方はまた、足先を内へ向かわす。  
(スエンソン・エドゥアルド著、長島要一訳『江戸幕末滞在記』)<sup>14)</sup>

以上のように「内股歩行」は、日本人男女にみられた歩容形態の一つであったのである。

次に「爪先歩行」であるが、「爪先歩行」とは足の前方部（爪先部分）に体重の大半をかけて歩む歩容のことを意味する用語である。この歩容形態も下駄や草履といった日本の履物の構造上、鼻緒を足ゆびで挟むことで履物を足に固定させるゆえに、必然的に足裏の前方部に体重がかかる。すなわち、第三者からみると爪先部分だけで歩いているように見える。その様子を興味深く記述しているのが、明治初期に来日した Hearn, Lafcadio (1850-1904、日本名:小泉八雲)である。

The whole population is moving on tiptoe, --. All those feet are small, symmetrical, light as feet of figures painted on Greek vases, -- and the step is always taken toes first; indeed, with geta it could be taken no other way, for the heel touches neither the geta nor the ground, and the foot is tilted forward by the wedge-shaped wooden and the foot sole. Merely to stand upon a pair of geta is difficult for one unaccustomed to their use, yet you see Japanese children running at full speed in geta with soles at least the three inches high, held to the foot only by a fore strap fastened between the great toe and the other toes, and they never trip and the geta never falls off. Still more curious is the spectacle of men walking in bokkuri or takageta, a wooden sole with wooden supports at least five inches high fitted underneath it so as to make the sole structure seem the lacquered model of a wooden bench. But the wearers stride as freely as if they had nothing upon their feet.

(Hearn, Lafcadio. "Glimpses of unfamiliar Japan")<sup>15)</sup>

人々は皆が爪先で歩いている。(中略)歩くときにはいつもまず第一に足指に重心が乗る。実際下駄を用いる場合にはそれよりほかに方法がない。なぜなら、踵は下駄にも地面にもつかないから、真横から見ると楔型に先細りした下駄に乗って足は前のめりになって前進する。一足の下駄に足をのせてだけでもなれない者にはむづかしい。でも、日本の子供たちは少なくとも3インチ(約7.6cm)の高さの下駄をはいて、鼻緒を親指と次の指との間に

14) スエンソン・エドゥアルド著・長島要一訳 (1989)『江戸幕末滞在記』、新人物往来社、p.79.

15) Hearn, Lafcadio. (1910), Glimpses of unfamiliar Japan. 2nd ser. Leipzig Bernhard Tauchnitz. p.114.

ひっかけただけで全速力で走る。彼等はずまづいてたおれることもなければ、下駄が足から抜け落ちることもない。大人が履くのは木で出来た台に 5 インチ (約 12.7cm) もの歯を付けた高下駄で、床几の漆塗りの小型模型といった具合だが、それを履いて男たちが歩き回る格好はなお一層奇妙である。彼等は足に何もはいていないかのように大股で思うさまに歩く。  
(小泉八雲・平川祐弘編『神々の国の首都』)16)

このように日本の履物に起因する歩容形態ともいえる「爪先歩行」であるが、平沢 (1971) は古代遺跡に残された日本人の足跡から、古墳時代までの日本人の足跡の五指が扇のようにひろがり踵が小さくとがっており、中足指節関節に力をいれて前傾姿勢で立っていたことを報告し<sup>17)</sup>、谷釜 (2006) は外国人見聞録の記述から、日本人の「前傾姿勢」は歩行時のみにあらわれたものと言うよりも日本人の姿勢そのものが「前屈み」であった可能性も指摘していること<sup>18)</sup>、そしてさらには、2004 年に科学雑誌‘Nature’には、人間は本来、中足骨部分から着地する走法 (fore-foot strike) であったのだが、1970 年代のランニング・シューズの開発によってクッションの利いた厚底の靴が着用され、踵着地 (rear-foot strike) に移行した結果、膝や腰の故障が増えるようになった、という研究結果からも<sup>19)</sup>、日本人の「爪先歩行」や「前掲姿勢」といった歩容形態は、日本の履物だけに起因するのではない可能性は高い。

‘歩行時の音’に関しては、日本の履物の構造上、履物の踵部分が歩く度に離脱することが要因となって、靴着用時の音に比べて大きくかつ異質なものと異文化圏の人には聞こえたのは当然であろう。しかし日本人は、日本の履物から生じるこれらの特種な音を‘粋’としたり、‘興’を感じたりする感性を形成していたのは興味深い。

その一つは、竹皮草履の裏に革をはった草履である「雪駄」を着用したときに生じる音である。「雪駄」に破損防止のために「尻鉄 (しりがね)」という鋏が打たれているため、歩く度に「チャカチャカ」という音が生じる。日本人はその音を‘粋’なものとして「ちゃらがね」と命名するほどで、江戸元禄期以降に流行し、「尻鉄」がないものは「雪駄」と言われなくなったという<sup>20)</sup>。また、台の底を抜いてうしろを丸く前部をまえのめりにした高下駄である「ぼっくり (木履)」<sup>21)</sup> の歩く度に「ポックポック」という音に興を感じ、子供用の「ぼっくり」の音には魔除の願いを込めていたという。さらには、台の中央を切り離して表を革の鋏

16) 小泉八雲・平川祐弘編 (1990)『神々の国の首都』、講談社、p.107。

17) 平沢弥一郎(1991)『足の裏は語る』、筑摩書房、pp.104-118。

18) 谷釜尋徳 (2006)、前掲論文、p.11。

19) Bramble, D. M. & Lieberman, D. E. (2004), Endurance running and the evolution of Homo. Nature432, pp.345-352.

20) 『日本国語大辞典』、Japan Knowledge website, <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=20020264165apbc4pMN>, (参照 2014.12.4)

21) 『日本国語大辞典』、Japan Knowledge website, <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=200203debddd61UT85m7>, (参照 2014.12.4)

打ちでつなぎ裏の中央をくりぬいて前後が曲がるようにした「引き摺り下駄」<sup>22)</sup> という女性用の下駄を履いた時は、わざと摺る音を出すことが歩き方の「粋」とされていた<sup>23)</sup>。

以上のように、日本人の歩容形態の特徴のいくつかには文化として成り立っていたのである。

## 2 - 2. 現代

現代の日本人の「歩容」特性については、社会学的に調査された研究がある<sup>24)</sup>。世界6カ国(アメリカ、イギリス、中国、インドネシア、イタリア、日本)の都市で、‘the pace of life’の比較調査の一つとしてそれぞれの国の歩行者の歩行速度を測定したところ、100 feet (約 30.5 m)に要する時間が日本人(東京と仙台)が20.7秒で最も速く、次にイギリス人21.6秒、そしてアメリカ人22.5秒、と続いていたことがアメリカの心理学雑誌 *Psychology Today* (1985)で報告されている。また、近藤義忠(2003)は、東京と横浜で西欧人と日本人との歩行速度を比較したところ、体格の小柄な日本人が外国人と遜色ないスピードで歩いていることを報告しており<sup>25)</sup>、辻村・長山(1979)は、歩行速度を「社会的速度の指標化」(ある目的を達成するのに必要な時間‘Social Speed’)の一つとして、パリ(フランス)、マニラ(フィリピン)を含め、日本の18の県庁所在地で歩行者の歩行速度を測定したところ、大阪(1.67m/秒)、東京(1.56m/秒)、長野(1.53m/秒)の順で速く、パリは7番目(1.46m/秒)、マニラは最も遅い福島県桑折町の次(1.24m/秒)であったことを報告している<sup>26)</sup>。これらの結果から現代日本人の歩容が‘早足’であったことが証明され、文明化・近代化の重要な指標である「社会的速度」(Social Speed)からみると、この「早足歩行」は、日本人の時間短縮行動傾向の一つであり、文明化及び近代化を象徴したものと考察されている<sup>27)</sup>。

次に、生理学的に分析された研究によると<sup>28)</sup>、日本人の歩幅の平均は、男子が15～19歳時の75.22±7.47cmが最大で、その後10歳毎に2cmほど短くなり、70歳で60cmを割る。女子は15～19歳時の66.08±7.0cmが最大で、その後男子と同様に加齢とともに短くなり、70歳で50cmを割る。男子の歩幅は女子より10cm程広いが、日本人の歩幅を日本在住の欧米人と比較すると、男子は約9～10cm、女子は約7～8cm欧米人より短い。また、歩行速度と歩幅の関係を欧米人と比較すると、同速度における日本人の

22) 『日本国語大辞典』、Japan Knowledge website,

<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001015364700>, (参照 2014.12.4)

23) 福岡裕爾(2011)。身振。常設展示室(部門別)解説387。福岡市博物館。

24) Levine, R. & Wolff, E. (1985). Social time: The heartbeat of culture. *Psychology Today*. pp.28-35.

25) 近藤義忠.(2003)日本人の健康意識と行動(その5)－文化としてのウォーキング－。仙台白百合女子大学紀要7。p.113。

26) 辻村明、長山泰久(1979)。統計からみたセカセカ日本。文芸春秋。pp.138-146。

27) 辻村明、長山泰久(1979)、前掲論文、pp.138-146。

28) 阿久津邦男(1975)、前掲書、pp.139-142。

歩幅は短かく、歩幅が身長に比例するという影響を取り除いても（歩幅の規準化）変わらない<sup>29)</sup>。歩行速度と歩数の関係においては、同速度であれば日本人の歩数が断然多く、歩数と歩幅の関係における比較でも、同じ歩数で歩くと日本人がいかにか短い歩幅であるかが明確で、歩幅の差を身長以外の要因として考えられる下肢長の差（脚の長さ）で規準化しても実質的な影響は少ない<sup>30)</sup>。

以上のように、現代日本人の歩容形態は短い歩幅で歩数の多い‘pitch 歩法’であることが証明され、生理学のおよび社会学的分析の双方から、現代日本人の歩容形態は‘セカセカ歩行’（急か急か歩行）と呼ばれている。

その他の現代日本人の歩容形態の特徴については、‘腕のふりを利用せず’、‘膝を曲げたまま’が指摘されている<sup>31)</sup>。

野村（1996）はイタリアのある都市で、ゾロゾロという足をひきずる音をたてて歩いているのが日本人旅行者だったことや<sup>32)</sup>、正月時に帰省した際、道行く人を後からみると、みんな見事なほど足の裏をひらひらとみせて歩いており、洋服と靴の着用ならゾロゾロと、振り袖に草履ならパタパタとひきずって歩く姿をみて、「こういう点（引きずり足で、また、足ゆびでふんばって歩く歩容）は感心するほどかわらないのだ」と述べている<sup>33)</sup>。

また、日本人の足跡から‘立ち構え’を研究報告した平沢によると、現代日本人の‘立ち構え’が後退傾向にあると指摘されている<sup>34)</sup>。1960年の測定では、立位での重心位置（踵の最後端からつま先までを100とした、踵からの重心位置をみる基準値 position of gravity:G%）が、6歳から14歳までは40～50%へとゆっくり前方へ移行し、15歳から90歳代の間で同じ47%の周囲に位置していたのが、1980年の再測定では40%周囲に後退しており、‘ふんぞり返ってゆく様相’になっている、と表現している。

「内股歩行」については、吉沢ら（2009）が女子大学生の7割以上に「内股歩行」が出現していることを確認し、その要因として着物などの身体文化やテレビ・雑誌等の大衆メディアにみられるモデルが内股気味の立ち姿（pausing）で映っていることとの関係を指摘している<sup>35)</sup>。確かに、現代のアニメや漫画に登場する「かわいい」女の子たちは「内股立ち」に描かれていることから、現代の若年日本人女性の間には「内股」嗜好が存続しているようにみえる。

29) 佐藤方彦編(1988)『日本人の生理』、朝倉書店、p.150。

30) 佐藤（1988）、前掲書、p.151。

31) 野村雅一（1996）『身ふりとしぐさの人類学』、中公新書、pp.19-20。

32) 野村（1996）、前掲書、pp.13-14。

33) 野村（1996）、前掲書、p.20。

34) 佐藤（1988）、前掲書、pp.113-114。

35) 吉沢小百合、原田奈名子、原部聖子。(2009)。女子大学生における内股歩行の客観と主観による出現頻度の違い。佐賀大学紀要 13(2)。pp.35-42。

### 2-3. 考察

外国人見聞録から明らかにされた幕末期から明治期の日本人の歩容形態の特性の主たるものには、①足を引きずること、②小股歩行、③内股歩行、④爪先歩行、⑤前傾姿勢、⑥歩行時に音が生じること、があげられていたが、この他にも⑦腕振りを利用しない、⑧膝が曲がっている、も指摘されており、日本人はきわめて独特な歩容形態で歩いていたことが明らかになった。そしてそのほとんどの特性が現代日本人にもみられる一方、⑨pitch歩法（‘セカセカ歩行’）であることも証明されていた。また、①から⑥に関しての要因のほとんどが、日本の伝統的な履物・着物の着用という外的要因によるものと考えられ、⑨は近代化という社会の要求するスピードの高速化の影響であると考察されていた。

生理学的には、歩容形態の特性は日常生活における歩行態度や、環境、人類学的・解剖学的な体型の違いが関係するという<sup>36)</sup>。近年、日本の生活環境は欧米化され、人類学的な体型も変化してきている。遠藤（1993）は、文科省の学校保健統計から毎年報告される日本人学童の身長に対して座高の伸びがそれほどではないことや、男子大学生の「四肢長」対「身長比」が高くなっていること、また、成人女性の「股下長」対「身長比」が増加していることなどから、日本人の体型が総体的に脚長で座高の低い体型に変化していることを報告し、栄養状態や生活環境の変化によるものであり、人種の遺伝的特性も環境的因子に依存する部分が多いのかもしれないと考察している<sup>37)</sup>。

以上のことから考えると、日本人の歩容形態が昔も今もほとんど変わらないのは、環境や体型の変化による影響がみられず、日常生活における歩行態度、すなわち近代化という影響だけがみられたということであろうか。また、ここで再考すべき点は、外国人見聞録に記された日本人の歩容形態は、日本の履物や着物の着用時のものであるもので、それらの影響下にはない歩容形態がどのようなものであったかについては明らかでないということである。現代日本人の歩容形態の、小股（狭い歩幅）で足数の多い‘pitch歩法’は、日本の履物や着物に規制されない歩容である。そして、野村（1996）が指摘するように現代日本人の‘引きずり足’歩容で、欧米人と同じように靴を着用した際に違った音が生じ、足先でふんばって、前屈み気味の姿勢で歩く形態は、③（内股歩行）以外の①から⑥の歩容形態そのものである。とすると、①・②・④・⑤・⑥の歩容形態は、日本の履物や着物を着用に関係なく存在していたのではないかと考えられるのではないだろうか。すなわち、近代以前の日本人も裸足で着物を着用していない状態でも、引きずり足（①）ぎみで、狭い歩幅で（②）、つま先に重心をのせた足取りで（④）、前掲姿勢（⑤）、そして歩行時には独特な音が生じる（⑥）歩容形態で、速さだけは現代人よりずっと遅く、のんびりと歩んでいのではないかと推測する。すなわち、日本人本来の歩容形態は、社会的環境、体型、歩行時

36) 佐藤（1988）、前掲書、pp.151-153。

37) 遠藤晃・石川仁・千葉克司・重茂克彦（1993）。日本人高校生の体格と体型の年次推移。日本医事新報 3628。p.50。

の着用物の変化に影響されることなく昔も今もほとんど同じだったのではないだろうか。

しかし、「内股歩行」に関しては解明し難い。というのは、現代においても日本人の歩行姿を注意してみると、確かに男女双方に「内股」傾向の歩容を多々見うけられるからである。吉沢ら (2009)が述べているように文化として「内股歩行」嗜好が日本人女性間には存続しているようであるが、現代の男性のなかにはその美学は存在しない。日本人男女の「内股歩行」の統計的研究を確認できないのだが、「内股歩行」は医学的には「うちわ歩行」、あるいは内旋歩行 (toe in gait)と呼ばれ、その要因は先天性の変形といわれ前捻角が大きい小学生に多く徐々に改善されるという<sup>38)</sup>。「内股歩行」が日本人の人類学的な歩行形態の特性であるのか否かは不明である。しかし、何らかの要因によって昔も今も「内股歩行」は存在しているのは確かである。

### 3. 結び

「歩容」動作についてフランスの文豪 Balzac, Honore de (1799-1850)は、「歩きかた」は身体の表情であり、「歩き方」には各々の職業や生活習慣が反映される」と述べている<sup>39)</sup>。本稿で論じた日本人の自然歩行における特徴ある「歩きかた」は、まさしく日本の文化が醸し出す「からだ」の「表情」であり、その表情 (特徴)を「粋」や「興」として受け入れる文化が存在していた。

日本人の「歩容」には、「自然歩行」のみならず「特殊歩行」にはまさに、文化として、能や武道などの伝統芸能における「すり足」、作法や儀式における「歩容」、「歩容」を「術」として大成した歩行術などがあり、日本人の「あし」は多くの身体表情をみせ、表情豊かな「からだ」にしてくれていた。

しかし、この表情豊かにしていた日本人の「あし」が、現代の便利化された生活のなかでなおざりにされ、また健康障害の要因となっていることは周知のとおりである。昨今の「Walking」流行は現代人が「あし」の最も基本的な機能に立ち戻っているようにみえるが、「動き」としての「あし」をなおざりにしている現代日本人の新たな角度からの「あし」への注目も見逃せない。それは、近年の「癒しブーム」のなかでの「足裏マッサージ」や「五本指靴下」の人気や「地下足袋靴」や「五本指シューズ」の登場、さらには足爪の手入れや装飾である pedicure の流行である。日本人の「あし」に新たな文化が形成されつつあるようだ。

38) 田中康仁・北田力編集 (2010)『図説 足の臨床』改訂3版、メジカルビュー社、p.74。

39) バルザック・オノレ・ド著、山田登世子訳 (1982)『風俗のパトロジー』、新評論、pp.79-146。

## 【参考文献】

- 阿久津邦男(1975)『歩行の科学』不味堂新書 15、不味堂、pp.62-65, pp.139-142.
- 遠藤晃. 石川仁. 千葉克司. 重茂克彦 (1993). 日本人高校生の体格と体型の年次推移. 日本医事新報 3628. p.50.
- 樺山紘一(2008)『歴史のなかのからだ』、岩波書店、p.8.
- 北村一夫(1987)『吉原のホログラフイー：江戸・男と女の風俗』、六興出版、pp.163-167.
- 小泉八雲・平川祐弘編(1990)『神々の国の首都』、講談社、p.107.
- 近藤義忠(2003). 日本人の健康意識と行動 (その5) - 文化としてウォーキング - . 仙台白百合女子大学紀要 7. pp.107-114.
- 近藤四郎(1979)『足の話』、岩波新書、p.99, pp.163-164, pp.169-170.
- 笹本信子 (1986). 足の着地期・離地期からみた和装時の歩容に関する研究. 家政学雑誌 37 (8). pp.695-704.
- 佐藤方彦編(1988)『日本人の生理』、朝倉書店、pp.113-114, pp.138-155.
- スエンソン・エドゥアルド著・長島要一訳 (1989)『江戸幕末滞在記』、新人物往来社、p.79.
- 田中康仁・北田力編集 (2010)『図説 足の臨床』改訂 3 版、メジカルビュー社、p.74.
- 谷釜尋徳. 幕末～明治初期における日本人の歩行の特徴について. 日本体育大学紀要 36(1). 2006. pp.1-18.
- 辻村明、永山泰久. 統計からみたセカセカ日本. 文芸春秋. 1979. 7 月. pp.138-146.
- 『日本国語大辞典』、Japan Knowledge website, <http://japanknowledge.com/library/>
- 野村雅一 (1996)『身ぶりとしぐさの人類学』、中公新書、pp.13-14, pp.19-20.
- ハワード・エセル著、島津久大訳 (1992)『明治日本見聞録：英国家庭教師婦人の回想』、講談社、p.41.
- バルザック・オル・ド著、山田登世子訳 (1982)『風俗のハプロロジー』、新評論、pp.79-146.
- 平沢弥一郎(1991)『足の裏は語る』、筑摩書房、pp.104-118.
- 福岡裕爾 (2011). 身振. 常設展示室 (部門別)解説 387. 福岡市博物館.
- 矢田部英正 (2007)『美しい日本の身体』、ちくま新書、p.188.
- 吉沢小百合、原田奈名子、原部聖子. (2009). 女子大学生における内股歩行の客観と主観による出現頻度の違い. 佐賀大学紀要 13(2). pp. 35-42.
- 吉竹博 (1981). 日本人の身体意識. 労働の科学 36 (2). p.65.
- Bramble, D. M. & Lieberman, D. E. (2004). Endurance running and the evolution of Homo. Nature 432, pp.345-352.
- Howard, Ethel(1918). Japanese Memories. The Chapel River Press. p.12.
- Hearn, Lafcadio(1910). Glimpses of unfamiliar Japan. 2<sup>nd</sup> ser.. Leipzig Bernhard Tauchntz. p.114.
- Levine, R. & Wolff, E. (1985). Social time: The heartbeat of culture. Psychology Today. pp.28-35.

## 要 旨

This study is investigating cultural diversity in Japanese foot and leg from the point that human body could be an emblem of its culture. In this paper I discussed about Japanese gait forms.

According to previous researches, there were six main characters of Japanese gait form between the end of 19<sup>th</sup> century and the beginning of 20<sup>th</sup> century, from the end of Edoera to Meiji era(1). Those were ①shuffling, ②short strides, ③inward, ④fore-foot landing, ⑤leaning forward, ⑥odd sound. In the 20<sup>th</sup> century(2) 'pitch' walking forms(short-stride with many steps) and fast speed were proved physiologically and sociologically.

The factor of (1) was mostly wearing Japanese traditional footgear (Geta:下駄, Zohri:草履), and (2) was considered an influence of high speed society in modern days.

I presume that (1) might be Japanese natural gait forms regardless of footgear because most Japanese gait characters were inherited among modern Japanese who didn't wear traditional footgear and whose physique were taller and bigger than before. And an interesting point was that there were Gait culture in Japanese gait character ① and ⑥. One was called 'hachimonji (八文字)' gait, which was special shuffling gait with 'Taka-geta (高下駄)' by 'Oiran(花魁)' courtesans as a show in Edo era. The other was Japanese unique sense to enjoy walking sounds by 'Setta (雪駄)', 'Pokkuri (木履)' or 'Hikizuri-geta (引きずり下駄)' as stylish or charm sound.

Japanese had unique gait forms in the past and now. Furthermore nowadays foot reflexology, five-toe socks and pedicure were getting popular and popular because of so-called 'Healing' therapy boom. I believe these Japanese new interests in foot and leg must add new cultural diversity.

キーワード : human body, culture, foot, leg, gait, walking, footgear

투 고 : 2014. 11. 30  
1차 심사 : 2014. 12. 13  
2차 심사 : 2015. 1. 3